



溺れるサカナ

吉井サヤ

急に降り始めた雨が、黒をバックにした都会の景色を溶かしていく。

僕は、パトカーの後部座席から、それを見ていた。車内に沈黙を満載したまま、車は首都高速を滑るように走っていく。堅いシートの上で軽く身じろぎすると、両手につけられた銀色の輪と、それをつなぐ短い鎖が、小さな金属音を立てた。僕の隣に座る警官が、その動きを見とがめて僕を睨む。そんなに怖い顔をしなくても、何もしないのに。と、僕は思う。

そう、僕はもう何をする気もなかった。僕がすべき事は、もう全てやり遂げていたからだ。手首にこんなものをかけられても、僕は確かな充足感に包まれていた。

窓ガラスに右の頬を押しつけるようにして寄りかかる。硬質な冷たさに、自分の頬がいつもよりも火照っていることを知った。

僕の世界で一番大切な女の子は、僕の肌に触れる度に「冷たいね」と言った。手に触れた時には決まって「手が冷たい人は心があったかいんだって」なんて迷信を、恥ずかしげもなく口にする。「貴則は優しいから、この話は本当だね」と屈託のない笑みを浮かべていた彼女は、だけど、もうこの世にはいない。

彼女は、僕が殺した。

「殺して欲しい、って。言われたんです」

唐突に僕の声が、車内の沈黙を揺らす。そんな事を言ってみたくなくなったのは、滲んだ景色の向こうに東京タワーのオレンジ色が見えたような気がしたからかもしれない。

「無駄口をたたくな」

僕の隣の警官が言った。

「そういうことは、署で話せ」

そういうこと、とは、どういうことだろう、と僕は思った。ただの世間話程度のつもりだったのに。

けれども、彼が気分を悪くしたのは確かであるようだったので、僕は大人しく口をつぐんだ。彼を不快にさせるのは、本意ではない。

「いいよ」

助手席に乗った年輩の刑事が言った。「好きにさせてやれ」。言いながら、彼は背広の胸ポケットから煙草を取り出して火をつける。

僕の隣の警官は「でも」とか「だって」とか言いかけながらも、言葉が見つからなかったのか、上司に反論することを躊躇ったのか。結局何も言うことができずに空気を食んで、口をぱくぱくとした。水槽の中の金魚のようだ。

助手席の刑事は、後部座席の警官のそんな様子をバックミラー越しに見ながら、笑うような息と一緒に煙草の煙を吐く。

「たまには、高瀬船気取りも悪くないさ」

僕が彼女と初めて出会ったのは、一年前のちょうど今頃のことだった。

きっかけは、一つのウェブサイトだった。

それは最近流行の、ソーシャルネットワークサービスのサイトで、随分前に登録してから、それきりになっていた物だった。様々な種類の人間と出会えて楽しいから、と言う友人に誘われて登録したはいいものの、僕にはいまいち楽しみ方がわからなかったのだ。

最初にメッセージを送ってきたのは彼女の方だった。彼女はサイト上でのハンドルネームを「サカナ」としていた。メッセージには「はじめまして」という件名と「東京タワー、綺麗ですね」という一行だけの本文があった。

東京タワーというのは、僕がプロフィールの画面に登録している写真のことだ。普通は、携帯電話で撮った自分の写真やペットの写真、自分のトレードマークとなるような物の写真や画像を載せる場所だ。

僕の場合は、友達に誘われてつきあい程度で登録したサイトだったからか、最初のプロフィール登録の際に興味で撮っていた写真の中から、気に入っているものを適当に選んで設定したままになっていた。彼女は、それを見てメッセージを送ってきたらしい。

一体どんな人物なのだろうかと、彼女のプロフィールを見みると、年齢は僕の一回り下の22歳。東京都内に住んでいて、好きな食べ物はチョコレート。コーヒーよりは紅茶派。趣味は映画鑑賞ということだった。プロフィールに添えてあるのは、若い女の子らしくプリクラの画像で、それを見る限りではかわいらしい女の子だと思った。黒髪のセミロングに、卵型の輪郭。ややつり気味のぱっちりとした目は、どこことなく野生の猫科の動物のような印象を与えている。

実際の僕の生活の中では、絶対に接点がないタイプだ。

少しだけ迷ってから、僕は返事を書くことにした。せめて、褒めてもらったお礼くらいは言いたかったのだ。

返信のボタンをクリックすると、フォーム形式の返信画面が現れた。

こういうSNSのサイトでは、登録者がサイト内のみでやりとりできるメールサービスがある。彼女はこれを使って僕にメッセージを送っていた。これなら、自分の実際のメールアドレスを相手に知らせることなく、メッセージのやりとりができる。

しかし、件名に「はじめまして」と打ったところで、手が止まった。

こんなことを言うとおやじ臭くていやなのだけど、こんな若い子（しかもそこそこ可愛い）とサイト上でのこととは言え、言葉を交わすのは久しぶりすぎて、少し緊張していた。

何か気のきいた文句の一つでも書きたくて、ああでもないこうでもない、とさんざん悩んだ。何度書いては消しを繰り返したかわからない。結局たっぷり30分かけて「ありがとうございます。東京タワーが好きなんですか？」と、なんのひねりもない本文ができあがった。

送信ボタンを押して、メッセージが相手に正常に届いた旨を知らせるメッセージが画面上に現れると、どっと疲れが押し寄せてきた。

年をとるごとに、メールでたわいのない会話をする、ということが困難になってきている気が

する。数年前までは、メールで中身のない会話を、パケット通信定額のシステムに甘えて、朝までだって続けていられたのに。

やれやれと軽く嘆息してから、僕はコーヒーを淹れるために、パソコンの前を離れた。

コーヒーを持ってパソコンの前に戻って来た時には、もうすでに彼女からの返事が返ってきていた。

新着メッセージの存在を知らせる文字に、年甲斐もなくわくわくしてしまう。

コーヒーを一口飲んで気持ちを落ち着けてから、僕はメッセージを開いた。

[どういたしまして。東京タワーは嫌いです。毎日見てるから。綺麗だと思ったこともありませんでした。海さんの写真を見るまでは。だから、驚いて、思わずメッセージ送ってしまったんです。いきなりすみませんでした。お返事ただけてうれしかったです。]

海、というのは、SNS上での僕の名前だった。本名が海野正明と言うので、そこから一文字とったのだ。

一通目とは違う長い文章を、三回続けて読んでからようやく、僕は少し笑った。

直情的な性格なのだろうか。勢い余ってメッセージを送ってしまったはいいものの、今になって正気に戻って、あわてふためいているような様子が、メッセージの文面の向こうに透けて見えるようだった。

かわいいな。

そう思った瞬間、胸の奥、心臓の中心あたりが、少し暖かくなったような感じがした。それは、僕が久しぶりに感じた愛おしさだった。